



私の本棚から ー心に響いた本ーPart 2

○館長挨拶		
「多くの方の図書館利用を願って」	・ 萬 伸介	2
○図書館からのインフォメーション		
特別展示企画「歴史のなかの教科書～政治の動きと社会科」開催のお知らせ		3
多目的閲覧室・展示コーナーの利用について		3
○特集記事 「私の本棚からー心に響いた本ーPart 2」		
	・ 加藤 豊仍	6
	・ 村上タカシ	7
	・ M. K. MacManus	8
	・ 渡邊 博史、工藤 由莉	9
○学生の読書室～私が選ぶこの一冊～（第11回）		10
○私と図書館		
修士時代に通った図書館	・ 亀井 文	11
○本学教員等著作寄贈図書一覧		12
○表紙解説		
路傍の宝石ールリシジミ	・ 溝田 浩二	12

多くの方の図書館利用を願って

附属図書館長 萬 伸介

耐震改修工事が済んだ附属図書館の館長職を4月から務めることになりました。新装になった館内の状況などは「こもれび 115号（前号）」やホームページでも紹介されておりますが、とにかく多くの方々に図書館に足を運んでいただき直にその様子を見ていただきたいと思います。館内設備やサービス体制が新たになった図書館は本学の学生・院生・教員・職員のみならず地域・学校の方々の利用も願っております。

さて、昨今の図書館では電子媒体による情報の入手が大きな部分を占めているようです。その手軽さ・利便性は無視できません。しかしながら、私は、図書館における書籍・冊子体からの情報入手の重要性は今も昔も変わらないと思っております。以前にも述べたことがあるのですが、所要の書籍を本棚から探そうとしているとき、ふっと目にして手に取った別の書籍のページを開いたそのところに以前から知りたいと思っていた情報が記述されていた、そんな幸運を経験したことがあります。そのようなことができるのは、古本屋、書店、そして図書館です。直接書籍を手にとることができるから幸運を体験できるのだと思っています。是非、附属図書館の書棚の前に身を置いてみてください（その前にカウンターや蔵書検索コーナーを利用することもできるのです）。ゆったりと書籍とつきあう、小さな幸運を体験できる、そんな図書館であればよいと思っております。

幼児・児童・生徒が「読書」に親しむことの大切さは言うまでもないことです。その指導・支援の大きな役割を教員が果たしております。将来教員となる学生・院生が書籍と親しみそして書籍を大いに活用する、そのような場所として学生・院生に図書館を利用してほしいものです（本年度から22時までの夜間開館を実施しています）。

最後になりますが、教員養成大学の附属図書館としての機能充実に館員ともども努力しますので、学内外の皆様方のご協力・ご支援をお願い致します。



図書館2階マルチメディア室の様子

図書館からのインフォメーション

平成21年度附属図書館特別展示企画

「歴史のながの教科書～政治の動きと社会科～」

附属図書館所蔵の社会科教科書の展示を次の日程で行います。
江戸時代の資料から最近までの新旧社会科教科書を一覧できる
貴重な機会です。

また、社会科の先生方による記念講演会もあります。
みなさまのお越しをお待ちしております。

日 時：平成21年7月28日（火）～8月6日（木）
10:00～16:30
場 所：附属図書館1階 多目的閲覧室
講演会：平成21年7月31日（金）13:30～15:00
720教室（予定）



多目的閲覧室・展示コーナーの利用について

図書館には、書庫や通常の閲覧スペースのほか、様々なスペースがあります。
今回はその中から、多目的閲覧室と展示コーナーについて利用方法なども含めて
ご紹介いたします。

その1. 多目的閲覧室について

◇多目的閲覧室
は予約が
できる！

1階カウンターの目の前にあります。通常は、机と椅子を配置し、自習室（閲覧室）として開放しています。開館時間中はいつでも誰でも自由に利用ができます。また、この多目的閲覧室では飲み物を飲んでも構いません。

（他の閲覧スペースでは飲食はできません。）

さらに**多目的閲覧室は、事前予約により専有して利用することが可能**です。研修やゼミなどで専有して利用する場合には、事前に申し込みが必要です。机、椅子のほか、ホワイトボードやスクリーン、講師用の演台が備え付けてあります。必要な場合には、プロジェクターやマイク等の貸し出しも行っています。多人数（50人くらいまで）での利用が可能です。机や椅子の配置は変更しても構いません。ただし、利用後は元の配置に戻してください。

◇予約は
カウンターへ！

なお、事前予約により専有して利用している場合は、他の方が閲覧室として利用できない時もあります。

申し込みの際は1階カウンターへお越しの上、申込書に必要事項を記入し、提出してください。申込書は1回の利用につき、1枚提出してください。

図書館からのインフォメーション

その2. 展示コーナーについて

◇展示コーナー
は学生が利用
できる！

◇申し込みは
カウンターへ！

図書館の入口を入って、すぐ右脇にあるリフレッシュコーナーの奥のスペースになります。ちなみに、リフレッシュコーナーでは飲食が可能です。

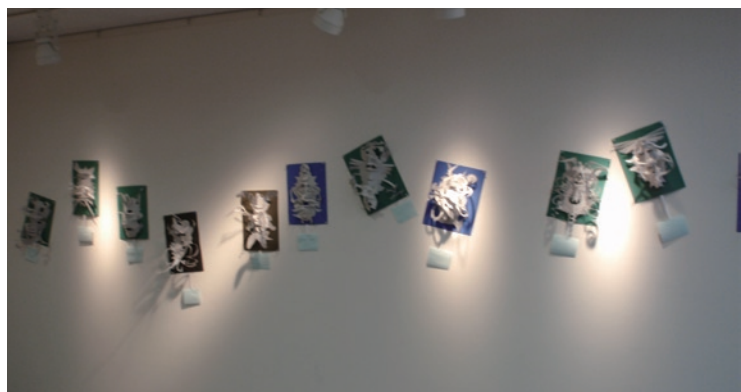
この展示コーナーは、本学学生や職員の絵画や写真、書道、工芸などの作品の展示に利用できます。（学生の中には附属学校園の児童・生徒も含まれています。）

幅・奥行ともに5～6メートルほどのスペースです。三方の壁面を展示に利用できます。実際の展示の際は、壁面にセロテープ等での直接の貼付はしないでください。また、設営や撤収の作業は図書館の開館時間内に行っていただくことになります。脚立等、必要に応じてお貸しできる物、用意できる物もありますので、なにかありましたら、1階カウンターへご相談ください。

なお、展示期間は1週間単位で5週間までの利用が可能です。

展示コーナーの使用を希望される場合は使用の1週間前までに申し込みが必要です。申し込みの際は1階カウンターへお越しの上、「展示場使用願」に必要事項を記入し、提出してください。利用に際しては館長の許可が必要です。ので、早めに手続きをお願いいたします。

○展示コーナーでの展示の様子

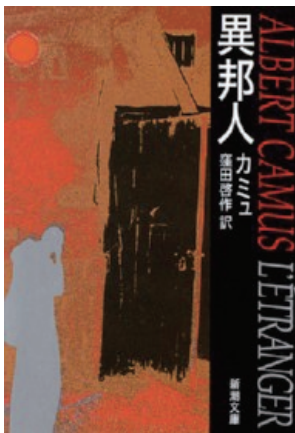


特集記事

私の本棚から一心に響いた本ー Part2

こもれび111号（2007年3月発行）の特集記事「私の本棚から一心に響いた本ー」で、みなさんから、自分の印象に残った本の紹介をしました。

今回はそのPart 2として、5人の方から心に残っている本を紹介していただきます。



『異邦人』
（カミュ著、窪田啓作訳；新潮文庫 1963年）



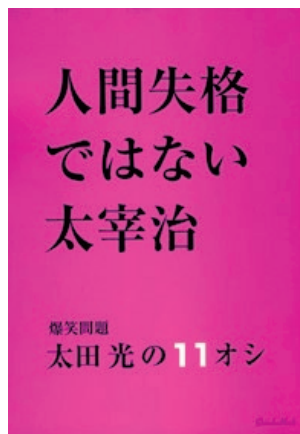
『フルクサスとは何かー日常とアートを結びつけた人々』
（塩見允枝子著；フィルムアート社 2005年）



The Reluctant Fundamentalist
(Mohsin Hamid ; Harcourt, 2007)
The Secret Scripture (Sebastian Barry ; Viking, 2008)



『マイホームレス・チャイルドー下流社会の若者たち』
（三浦展著；文春文庫 2006年）



『人間失格ではない太宰治ー爆笑問題太田光の11オシ』
（太田光著；新潮社 2009年）

- ・表紙画像は、すべて出版社の許可を得て掲載しています。
- ・The Reluctant Fundamentalist 及びThe Secret Scriptureについては、出版社の許可を得ていないため、表紙画像は掲載していません。

『異邦人』

(カミュ 著、窪田啓作 訳；新潮文庫 1963年)

国語教育講座教授 加藤 豊仟

ある方に諭されて、現在私は毎月1回父の墓参りをしている。碑には、父、母そして姉（昭和60年12月22日享年49歳）の名が刻まれている。アパートの一室で独り、テレビがつけっぱなしのまま、ベッドの上で亡くなっていた。神父がからだを直そうとしたとき、顔が動き、口中のドス黒い血がトロリと口びるから流れ落ちた。全身に血が滞っていたのだ。

カトリックの修道女、病気、還俗、結婚、二児の母、離婚、子どもとの生き別れ、酒によるあらゆる痛みからの逃亡。この姉の死の表情はおだやかだった。

『異邦人』の主人公ムルソーも、死刑執行が間近になった夜の星々を前にして、「私ははじめて、世界の優しい無関心に、心をひらいた。これほど世界を自分に近いものと感じ、自分の兄弟のように感じると、私は、自分が幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った。」

ハイデガーの『存在と時間』でも「死」を問うている。かつて私は「実存」という言葉に惑わされて、ハイデガーの「死」も結局、フッサールの「判断中止」を現実遂行する「哲学する人間」の意識を問題にしたのだということを見逃していた。だが、『異邦人』が投げかける「死」の問題は、地上の生物がいつも立ち会わされている背景としての大いなる世界、この世界の内なる「生ま身」の人間の死である。この「生ま身」の人間一人一人には、その人間固有の「生まの生活」が息づいている。この「生まの生活」そのものがその人にとっての「意味」なのだ。死刑囚に魂の償いを執り行い、「罪」に目覚めさせ、「神」に助けを求めさせようとする司祭の行為も、ムルソーにとっては何の「意味」もない、単なる「習慣」に過ぎない。裁判という名の「正義」も彼にとっては「習慣」に過ぎないのだ。ムルソーは語る、いのちあるすべてのものが死刑囚であり、そのことが「特権」なのだと。生ま身が生まの死を引き受けることではじめて、己れの生の意味が見えてくるからだ。姉のおだやかな死に顔の意味も、カミュのように、「きょう、ママが死んだ。」という書き出しから、「一切がはたされ、私がより孤独でないことを感じるために、この私に託された望みとっては、私の処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて、私を迎えることだけだった。」と結ぶまで、文庫本一冊の言葉の群れが必要だろう。『異邦人』にしても、船荷証券の山を点検する一芥の事務員でしかないムルソーが、どうして人殺しの罪に問われ、死刑囚となってしまったのか、ムルソーの生ま身がたどった生の意味を知るには、『異邦人』を丹念に読み解くしかない。

英語が苦手だった私は、みんなが同じスタートラインに立つ第二外国語（フランス語）に力を入れて勉強した。そのせいか今でもなぜかフランス語に執着している。『異邦人』も、比較的短い文章で淡淡と半過去形で語られているので、ポケット版の原文をたよりに、思い出しては音読するようにしている。かなり前に手に入れたフランス人の生まの朗読のテープも合わせて聞くようにしている。この4月から、また思い出したように『異邦人』のテキストを読み始めた。ポケット版で179頁。今やっと15頁である。

『フルクサスとは何かー日常とアートを結びつけた人々』

(塩見允枝子 著；フィルムアート社 2005年)

美術教育講座准教授 村上タカシ

芸術はいつの時代も創造と破壊の繰り返しである。硬直化した組織や社会システムに対してもアートというメディア（時には視覚的作品、時には身体表現、時には音や詩での表現など）を駆使し、挑発的なアクションを行ってきた。

「フルクサス」というのはグループのようでもあるが、一つ一つの実験的プロジェクトが集積したムーブメント（芸術運動）とも言える。

「フルクサス」は1960年代 ニューヨーク。ジョージ・マチューナスのもとに多国籍、多ジャンルのアーティストたちが集まったハイアートに対抗し、アートと日常の壁を越え、「流れる」（＝フルクサス）ことを目指す＜自由＞が表現となった。とある。

ハイアートとは大衆芸術の対極的な表現で視覚芸術であればサロン等でのお墨付きの作品群、音楽であればオーケストラを頂点とする表現活動とみるべきであろう。アートの実験的な試みは美術史的にはダダやシュルレアリズムがイメージしやすいが、ルネサンスやリアリズム、印象派、抽象主義などの新しい表現が生まれる際も認識との戦いの連続であった。ダリは「作品を評価するのは時代であって、人ではない」という名言も残している。

さてフルクサスの中心人物、ジョージ・マチューナスはリトアニア人であるが音楽、美術、身体表現と多ジャンルのアーティストが彼のまわりに集い、様々な実験的表現活動を行った。ビデオアートの先駆者ナムジュン・パイクや現代美術の巨人ヨーゼフ・ボイスも参加している。

著者でフルクサスメンバーでもある塩田允枝子は音楽の出身ではあるがパフォーマンスも多く行っている。日本人は意外と多くオノ・ヨーコや巖倉（アイオ）も参加している。オノ・ヨーコはビートルズの亡きジョン・レノンの夫人として記憶している人も多いかもしれないが、当時のオノ・ヨーコの実験的なパフォーマンスにジョン・レノンが衝撃を受けプロポーズしたらしい。第一回横浜トリエンナーレ（2001）で銃弾で穴だらけの列車の車両の作品で復活したオノはその後平和のメッセージとともに世界的アーティストとして活躍している。

巖倉はレインボーカラーの作品で有名だが当時はパフォーマンスも行っていたのは興味深い。また既成の表現とは異なるパプニングとも言われた「行為としてのアート」（アクション）は日本ではハイレッドセンター（高松次郎・赤瀬川原平・中西夏之）の活動とも繋がる。映像で観たことがあるがオノ・ヨーコは「シェルタープラン」の中で「小野マリア」というアーティスト名で参加している。

またフルクサスのメンバーのディック・ヒギンズは「インターメディア」という新しい概念を創り出した。視覚芸術、身体表現、音・詩といった既成のジャンルだけに囚われないクロスジャンルでフレキシブルな表現形態のことである。

「フルクサス」のその後の広がりや影響は大きい「新宿少年アート」（1994）を行った中村政人、仙台で発泡屋台を創ってその後ベネチアビエンナーレにも参加した開発好明も影響を受けている。「フルクサス」を海外でリサーチしていた開発は帰国後麻布の新しい画廊のオープニング展（2003）で展覧会名をSHINXUS（新クサス）とした。FLUXUS（フルクサス：古クサス）をリスペクトしてだろうがフルクサスのことを知らないと言ったとギャグも通じなかったと思う。ちなみに村上も両企画とも参加。面白かった！

みなさんも額縁に入った作品や台座にのった作品だけでなく、失敗を恐れず実験的な試みを行ってみることが大事です。現代はクロスジャンル（インターメディア）の取り組みが更に広がりつつある。「アートなんて自分には関係ない」とか「才能がない」なんて思っている人がいたらそれは間違った思い込みです。アートだと思わないで何かとにかくコラボでも良いのでチャレンジしてみましょう。

創造的な活動は美術館やホールの中だけではなく、日常的な行為の中で行われるべきだから。

The Man Booker Prize for Fiction

The Reluctant Fundamentalist (Mohsin Hamid ; Harcourt, 2007)

The Secret Scripture (Sebastian Barry ; Viking, 2008)

英語教育講座 M. K. MacManus

Recently I was reading an article in The Washington Post in which several writers were asked to name something they thought we no longer needed in our lives. The former editor of Book World, Marie Arana, picked the Nobel Prize in Literature, saying the choices were always far too subjective, lacked critical judgment and included too much political (left-wing) zeal.

I come from Ireland, a country which has produced four winners of that award, but for reading pleasure I prefer to choose from the short list for the Man Booker Prize for Fiction. This award was introduced in 1969 for full-length novels, written in the English language, by a citizen of the (British) Commonwealth of Nations or Ireland. Two books I would like to recommend are Mohsin Hamid's *The Reluctant Fundamentalist* and Sebastian Barry's *The Secret Scripture*, neither of which actually won the prize.

Of the six novels nominated in 2007, Hamid's book is a timely attempt at portraying the U.S.A. from the perspective of a not very devout Muslim, educated at an American university and employed by a major American company. The title of the book needs little explanation, tracing the change which takes place in the main character's way of thinking as a result of the events of September 2001. Too often the information we receive is too biased in favour of one country, so it is good to have a view from the other side.

Last year, Barry was nominated for *The Secret Scripture*, set in Ireland in the 1920's after independence from England. Like many countries enjoying a new freedom, Ireland experienced a period of civil war when it professed devotion to republican slogans. This was with bitter irony, however, because liberty, equality and fraternity proved to be viciously incompatible in a society which was extremely conservative and dominated by the Catholic Church. The heroine of the novel, imprisoned in an insane asylum for 50 years, keeps a secret diary recounting her life story while at the same time her psychiatrist makes notes about her as part of a review of patients who may have been committed unjustly. As with Hamid's book, Barry presents the views of someone from a minority, the Protestant minority, in a supposedly democratic country.

「マイホームレス・チャイルドー下流社会の若者たち」

(三浦 展 著；文春文庫 2006年)

総務室 工藤 由莉

さて、皆さんは自分が育ってきた時代について考えたことがありますか？その時代によって人の考え方や価値観、生活様式は様々に変化してきました。

今回紹介する本は、現代の若者の心理や行動、考え方について分析・読み解いたものです。最初手に取ったとき、「現代の若者はこうだ！」と断言できるのかと、ほんのり反発にも似た感情も持ったのですが、携帯電話、iPodやMP3、コンビニ、カフェの台頭や売れているアーティスト、ゲーム、〇〇系ファッションなど様々な切り口から分析・展開される現代の若者像には共感できる部分が数多くあります。

著者は現代を「マイホーム主義の崩壊」「ホームレス主義」と定義しています。本当に「家がない」ということではありません。現代は物があふれ、豊かさと便利さ故、マイホームに居ずとも、自分の部屋のような快適な空間を街に携帯して持ち出せるので、家に帰ることの重要性が薄れていると言うのです。

もはや「家」のみでは家族をまとめることができない時代になった…ちょっと衝撃を受けますよね。

それは、若者の考え方や価値観にも現れます。現代の若者は上昇志向が著しく低下しているということです。確かにハングリー精神という言葉は最近聞きませんよね。

「団塊の世代」と呼ばれる人達は、一生懸命働き、社会の発展と共に自分も成長しているという実感があったと言います。自分の存在を社会が肯定していたのでしょう。では現代はと考えると、自分と社会とを重ね合わせたとき、現代社会は豊かすぎるので、劇的な発展は見込めないという停滞感や不安を感じます。だから若者は自分の存在を肯定してくれる「社会」以外の何かを望むのかも知れません。

ぜひこの本を、時代に対する距離の取り方が難しい中で「若者」という時間を生きている学生の皆さんに、そしてその学生の皆さんと向き合う大学の教職員の皆さんに読んでいただきたいです。

『人間失格ではない太宰治ー爆笑問題太田光の11オシ』

(太田 光 著；新潮社 2009年)

渡邊 博史

この本は、私の後輩が勧めてくれた本です。

太宰治の作品と言えば、「走れメロス」や「人間失格」などが有名ですが、この短編集に載せられている作品は、太宰治に興味がない人にはあまり知られていない作品です。「富嶽百景」「駈込み訴え」「瘤取り」などタレントの太田光さんが選んだ短編が11本載せられているとともに、芸能人をはじめ約10人の方々が太宰治の作品についての思いをつづったエッセーも掲載されており、太宰治初心者でもあまり警戒することなくすんなりと読み終えることができます。

その数々の作品の中でもお勧めしたのは、古典をもとにして作られたお伽草子です。お伽草子は全部で4本あり「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」で、絵本などで読んだことのあるいわば昔話に太宰治なりの解釈が付け加えられています。小さい頃に読んだ昔話よりも、今になって太宰治の解釈が加えられたこれらの作品は非常に面白く人間味があり、読んだあとに少し考えさせられ深みの増した作品になっているのが特徴です。

今まで知っていた太宰作品というと、有名な「人間失格」などの作品に描かれている、人間の影の部分、私たちが目をそらしてしまいたくなるような真の人間について書かれているものが印象的で、読んだあと暗くなってしまうイメージが強かったのですが、このお伽草子は読んだあとに素直に面白かったと思えるもので、太宰治のイメージを変えてくれる内容となっています。

今年は太宰治の生誕100年ということで、「ヴィヨンの妻」や「斜陽」が映画化されるそうです。これは亡くなってから60年以上たった今でも、太宰治が現代の人々に沢山読まれている作家であるということだと思います。この機会に、皆さんも太宰作品に挑戦してみたいでしょうか。

第11回 学生の読書室 ～私が選ぶこの一冊～



『変貌する子ども世界 子どもパワーの光と影』 (本田和子著、中公新書、1999年)

子ども文化コース3年：田代智美

「子どもが変わってしまった」と言われている。しかし、変わったのは本当に「子ども」なのであろうか。著者である本田はこの問題提起から、様々な視点で戦後の「子ども観」と「子ども－大人関係」を探っていく。

戦後のベビーブームはかつてない数の子どもを生み出し、子どもをめぐる育ちの環境を変えていった。エネルギーあふれ、自由に育てられたベビーブーム世代の子どもたちは、戦後社会の激変の中で成長していった。テレビの普及による映像を中心としたメディア社会への適応、食品市場での子ども向け商品の開発と販売、塾通いが増えるなどの生活の変化。こういった戦後の子どもを取り巻く環境の変化が「子ども－大人関係」に影響を与えていった。

「子どもは変わってしまった」という見方は、社会状況、子どもの実態や生活環境、周囲の大人など様々な観点から見直すことによってまた違った見方になっていくものであろう。自分の考える「子ども観」「子ども－大人関係」とはどのようなものだろうか、無意識のうちに主観的な見方のみで捉えてはいないだろうか。自身の考え方を見直すきっかけとなる一冊である。



『数の悪魔』

(ハンス・マグナス・エンツェンスベルガー、丘沢静也訳、晶文社、1998年)

教職大学院1年：中村晴美

夜眠れなくて困るという人はいませんか？この本は、ぜひそんな時に読んでほしい一冊です。なんといってもサブタイトルは「算数・数学が楽しくなる12夜」ですから…

主人公は数学嫌いなロバートと彼の夢の中に出てくる数の悪魔。数の悪魔が、ロバートに楽しく、易しく数のレッスンをしていきます。回数を重ねるごとにロバートは少しずつ数学が楽しく、好きになっていくのです。数学嫌いの人のために、難しい専門用語を使っていないところも特徴です。例えば“4！”は、数学の世界では“4の階乗”とよびます。しかしこの本の中では、“4のびっくり”とよんで、その仕組みを易しく説明しています。紹介している数学的な内容は、素数、無理数、三角数、フィボナッチ数、パスカルの三角形、オイラーの公式など有名なものばかりですが、作品の中では「わけのわからない数と大根」「はてしない物語」「ヤシの実で三角形をつくる」などの章題をつけて物語が綴られています。この本を読んでいると、難しいことをいかに易しく解りやすく、そして楽しく説明することが大切かを考えさせられます。

さてさて、読み終わって再びタイトルについて考えてみると、なぜ“数の悪魔”というタイトルをつけたのでしょうか？こんなに易しく数について語ってくれる物語なので、“数の天使”としてもよいのではないのでしょうか。10歳から100歳を対象に書かれたこの本は、数学アレルギーの人にぜひ読んでいただきたい一冊です。



ここは学生の皆さんが最近読んだ本、印象が強かった本、お勧めの本などについて自由に選んでいただき紹介してもらうコーナーです。図書のみとし、雑誌は除外しています。

いただいた原稿を編集委員会で選定し掲載させて頂きました。

今後もこの企画を継続していきますので、皆さんからの投稿をお待ちしています。

ここに紹介する本は図書館入り口の書架に「学生の読書室」として配架しています。

【原稿大募集】

次号発行は3月の予定です。

名前、所属、学年、連絡先と、紹介する本の書名、著者名、出版社を記入の上、400字以内で、図書館カウンターにフロッピーディスクで、または下記アドレスへメールでお送り下さい。

toshokan@staff.miyakyo-u.ac.jp

尚、「こもれび」の記事は図書館のホームページでも公開されます。

図書館に所蔵していない図書については、(学生希望図書として)図書館に購入希望を出していただくことも出来ます。

『私と図書館』

修士時代に通った図書館

亀 井 文

小学校から大学まで私と図書館との関係は、非常に薄いものであったと思う。元々勉強は好きではなかったし、高校の図書室などは記憶も定かでない。さすがに大学では参考図書や資料を調べてレポートすることが多かったため、図書館にはそれなりにお世話にはなったが、今考えると図書館の機能を充分に使わず、残念な限りである。しかし、たとえそこに素晴らしい知識と情報の宝庫があったとしても、それを使うすべを知らなかった頃は、その場所は本や資料が置いてあり勉強が出来るスペースがある建物、という認識でしかなかった。

人生は本当に分からないもので、その後私はニューヨーク州立大学バッファロー校の健康関係研究科の修士課程に入り、栄養学の勉強をすることとなった。この大学には少なくとも10の図書館はあったと記憶している。その中で私が一番よく利用したのは健康科学系図書館である。まず、その図書館のリファレンスの方がこの図書館の使用法の説明と文献の検索方法を教えてくれた。その当時90年か91年、私はコンピュータとは縁遠く最初はさっぱり分からず途方に暮れた。しかし、リファレンスの方はとても優しく丁寧に辛抱強く何度も教えてくださった。あるリファレンスの方は「私たちの仕事は、あなたが欲しいという資料を調べて探し出す、そしてあなたの元に届けることです。だから何でも言ってくださいね。」とおっしゃってくれた。そして、本当に長い時間を私のために費やしてくれたのである。

授業では、あるトピックスについて最新の研究を調べてくること、あるいはreviewを作成してくること、というような課題がどんどん出されるため、私はほとんどの空き時間を図書館で過ごした。まずコンピュータでの文献検索、そして書架にいて雑誌を探しやっとなら文献を探し当てたら、すぐコ

ピーして文献を読み始める。読み進めると新たに参考文献を見る必要を感じて、またそれを探すという具合で、もし、この図書館に所蔵されていない資料が欲しいときには、ILL (interlibrary loan) ですぐに手配してもらった。この図書館は私に溢れるほどの知識を与えてくれる扉であった、というのが今の私の感想である。

そして、この図書館には学生にとって素晴らしいサービスがあった。それは、1日に3文献分のコピーは無料でしてくれることだった。このブースにはいつも学生が並んでいたが、いくつも文献を読んでいかなければならない学生たちにとっては、コピー代もばかにならない。私もこのサービスのお陰でかなりコピー代を節約することが出来た。このサービスは大学のサービスではなく、健康科学系の卒業生などの寄付の一部が使われているようであった。

もうひとつ、この健康科学系図書館以外に私が足しげく通った図書館は、この大学で一番大きな図書館だった。何故か？それは世界各国の新聞がここにあるからだだった。何日か遅れてくる日本の新聞を、本当に舐めるように読んだ。日本のことを知るだけでなく、日本語が読めることが無性にうれしかったのを覚えている。そこのスペースには、いろんな国の留学生が自国の新聞を熱心に読んでいた。

今は文献検索も研究室のコンピュータで出来るし、無料あるいは有料で文献も電子的に手に入れることが出来る。しかし、自分の眼で興味のある分野の書架を眺めてみたり、あるいは最新の雑誌をばらばらとめくってみたりするうちに、めあての資料よりももっといいのが見つかった、ということは図書館でしか出来ないことである。そして、そんな喜びを教えてくれたのも、あの修士時代に通った図書館である。

本学教員等著作寄贈図書一覧（平成20年1月～平成21年3月受贈分）

太田直道（社会科教育講座）

太田直道 著『人間の時間：時間の美学試論』花伝社 2008年

太田直道 著『生き方の道德教育：現代道德哲学二十講』三学出版 2008年

渡辺善雄（国語教育講座）

森富、阿部武彦、渡辺善雄著『『鴎外全集』の誕生：森潤三郎あて与謝野寛書簡群の研究』

鴎出版 2008年

表紙の解説

路傍の宝石—ルリシジミ—

環境教育実践研究センター 溝田 浩二

ルリシジミは北半球の冷温帯地域（ユーラシア大陸～北米大陸）に広く分布する小型のチョウで、日本では北海道から九州にかけて生息しています。庭先にも、草原にも、山道にもいるチョウで、鮮やかな瑠璃色の翅をチラチラさせて飛ぶ姿は、チョウに興味のない人でも「あっ、かわいい！」と好ましく思ってくれるに違いありません。フェルメールの代表作「真珠の耳飾りの少女（青いターバンの少女）」を連想させるほど、深く、艶やかなルリシジミの瑠璃色には、万人を惹きつける魅力があります。



ルリシジミの幼虫は、葉を食べて育つ大多数のチョウの仲間とは違い、花の蕾（つぼみ）を食べて成長します。とくにマメ科の花がお気に入り、春はフジ、夏はクララ、秋はハギを好むようです。幼虫はまるで忍者。ピンク色の花に見事に溶け込み、じっと身を潜めています。そんな幼虫を野外で発見するのは難しいのですが、コツさえつかめば拍子抜けするほど簡単に見つけることができます。そのコツとは、ミヤギノハギなどのマメ科の花に止まっているアリを探すこと。ルリシジミの幼虫は背中から甘い汁を出してアリの惹き寄せ、ボディーガードとして雇っているのです。

編集委員 附属図書館運営委員会委員 本間 明信（教育臨床研究センター） 遠藤 仁（国語教育講座）

編集 後記

今年度新たに宮教大に来られたみなさん、ここでの大学生活にはもう慣れましたか？
宮教大にきて2年目の私ですが、いまだに大学内の全貌を知りません。大学構内で一息つける場所があったら、ぜひ教えてください。ちなみに、図書館のリフレッシュコーナーは、新聞も読めるし、飲み物を片手にゆっくりできますよ。休憩にぜひどうぞ！
(H. N)